にしてつNEWSLETTER

2019年1月　第1号

Nishi-Nippon Railroad Co., Ltd.　まちに、夢を描こう。

西日本鉄道株式会社　総務広報部広報課

【会社所在地】〒810-8570 福岡市中央区天神1丁目11番17号 Tel:092-734-1217

Main Topic

◆◆ まちびらきから3年、多世代がつながるまち「あすみ」のいま

■ 住宅開発の一歩先へ「まちづくり」という新たな取り組み

西鉄初の大規模開発プロジェクトとして開発したコンパクトシティ「あすみ」が、2015年のまちびらきから３年を迎えました。あすみの最大の特徴は、大規模な住宅開発をするだけではなく、まちづくりにもコミットしている点です。キーワードは「つながるまち」。子育てやミドル、シニアなどの異なる世代をつなぎ、多世代コミュニティの活性と安心・安全な住環境の両方を実現する「タウンマネジメント」を重視したまちづくりプロジェクトです。

西鉄三国が丘駅前に位置する総面積12.6haの敷地には、255区画の戸建て住宅、分譲マンション、シニアマンションからなる居住施設だけではなく、駅前にはパーク&ライド駐車場が整備され、周辺には生活に必要な大型スーパーをはじめ医療機関などを配置し、高い利便性を誇ります。また緑道や公園などの豊かな緑に囲まれており、菜園やバーベキュー施設、集会やセミナーなどに利用できる「クラブハウス」などコミュニケーションの場も多数あります。これらを活用して、西鉄はイベントを開催したり自治会のサポートを行ったりと積極的にまちづくりに関わっています。さらに福岡県警の指導のもと防犯カメラを設置し、防犯設備も整備しており、安全で快適な暮らしを提供しています。

「あすみ」が県内にも複数存在する他の複合的な住宅街と大きく異なるのは、住宅やクラブハウスなどの「ハード」面だけでなく、“まち”としての「ソフト」面の取り組みに西鉄が積極的に取り組んでいる点にあります。住民同士・多世代にわたるコミュニティの形成のため、西鉄としても初めてまちに入り込んだサポートをまちびらき当初から進め、約３年間の伴走期間の中で少しずつ住民の間のコミュニティ形成が目に見えるようになってきています。

あすみプロジェクトを現在担当している住宅事業本部の福田智隆さんは「建物を売ったら終わり、ではありません」と語ります。「2011年に発生した東日本大震災以降、地域コミュニティの結びつきが求められる時代になり、人と人とのつながりのあるまちづくりに取り組みたいと考えました。西鉄では以前にも桧原エリアの開発で団地管理組合を立ち上げた実績があり、その過程で得た「コミュニティづくりのノウハウ」を、まちづくりに力をいれたあすみプロジェクトに活かすことで更なるサポートができると思ったのです。コミュニティづくりのサポートを始めて３年が経ちましたが、少しずつ住民のあいだにコミュニティができてきている実感があります」。

「食」をテーマにしたイベントで多世代交流

まちづくりを進めるにあたって、「食」に着目し、バーベキューや野菜の収穫など食をテーマにしたイベントをこれまでに30回以上開催しました。世代にかかわらず楽しめるテーマのため、子どもからシニアまでさまざまな世代が参加し、多世代がつながる場になっています。

まちの南側にある「収穫の庭」では、外部コンサルタントの協力のもと、野菜や果物を栽培。育てた野菜の収穫を住民の方と一緒に行い、収穫した野菜をみんなで味わおうとカレーパーティーを開くなど毎月イベントを開催して交流を図ります。まちびらき３周年のイベント「あすみマルシェ」では、収穫したさつまいもを販売しました。「さつまいもが完売したことに驚きました。売上金は運営資金にまわして、イベントの開催を続けられる仕組みを構築している段階です」と福田さん。

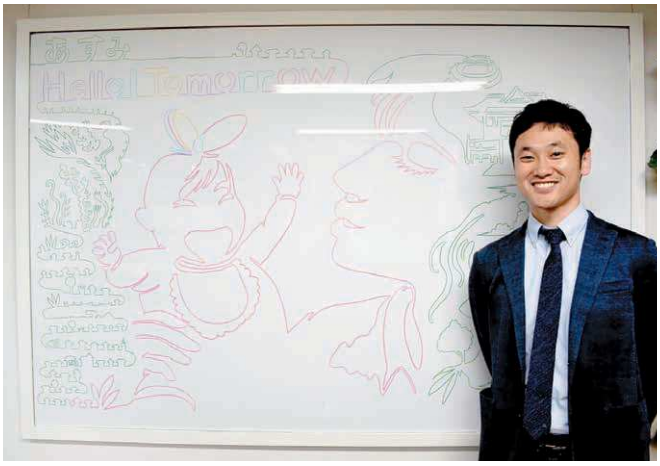
「あすみ」プロジェクト担当
西日本鉄道株式会社 住宅事業本部 福田智隆さん

現在は西鉄がイベントを主催していますが、今後はイベント運営のバトンを西鉄から住民の方に渡して、多世代が交流できる場が持続されることを目指しています。「西鉄が関わらなくてもイベントが継続できるように、ノウハウや失敗事例をたくさん伝えていきたいです。ゆくゆくは住民の方だけで運営していってほしいと思っています。もちろんサポートは続けていきます」。

みんなでつくる、これからの「あすみ」

イベントを通して親交を深めた住民の方々がクラブハウスで食事会を開催するなど、小さなコミュニティが増えてきており、イベントの成果が芽を出しはじめています。一方で課題もあると福田さんは言います。「子育てファミリー層やミドル層に比べて、シニア層の参加者数が少ない状況です。シニアマンションは戸建て住宅や分譲マンションに比べて、入居時期が２年ほど遅れたことが原因のひとつにあります。今後は、全戸にチラシを配布するなど告知に力を入れ、少しずつシニア層の参加者数を増やしていきたいです」。

また、住民の方々がクリスマスパーティを企画するなど、住民の方々主体の動きが出てきました。「イベントの運営側に入ってもらう住民の方々を探すのに難航していましたが、まちづくりに積極的な住民の方々も徐々に現れはじめており、イベント運営を住民の方々に移行して自立を促しつつ、ますます多世代の交流が活発になるように支援を続けます」と福田さんは前を向きます。西鉄は今後も住宅開発にとどまることなく、明日へとつながるまち「あすみ」のような活気あるまちづくりを進めていきます。



事業本部内のホワイトボードには
「あすみ」を象徴する親子のイラスト

■ インバウンド向け交通系ICカード「FUKUOKA GO PASS」で訪日外国人の利便性向上を狙う

2018年３月26日に訪日外国人旅行者の利便性向上を目的とした交通系ICカード「FUKUOKA GO PASS」を2,000枚限定、3,000円で販売開始しました。12月末時点で1,400枚購入され、福岡の観光を移動の面でサポートしています。

同カードは通常の交通系ICカードとしての利用だけでなく、福岡県内の観光や商業施設にて提示することで割引等の特典を受けることができる仕様となっており、外国人旅行者の福岡県内の移動促進の他にも観光利便性向上の可能性があり、次年度に向けて本格実施を行うか現在の利用状況などを加味して検討しています。

本年度の販売は次年度以降の本格実施に向けた試行販売となっていることから、購入者への事前アンケートも実施しており、現在の購入者は韓国、香港、台湾とアジア系旅行者が主となっています。

また、滞在期間４～７日の中期間旅行者や来日回数３～４回のリピーターに多く支持されていることがわかっています。

試行販売の結果を踏まえ、次年度以降の販売に向けて、カードの利便性などを再検討し、さらに外国人旅行者にとって使いやすいものにしていきたいと考えております。

西日本鉄道では、福岡県を訪れる外国人旅行者が250万人を突破し年々増加する中、「FUKUOKA GO PASS」の利用者拡大と利便性向上を目指してまいります。

■ 沿線自治体と共に鉄道閑散線区の活性化を考え、住民と共に路線を守り沿線を盛り上げる

少子高齢化に伴い福岡県内の交通事情も年々変化してきています。1992年にピークを迎えた鉄道の利用者数は、年々減少しています。

そんな中、西日本鉄道（株）と一部沿線自治体（久留米市、朝倉市、大刀洗町、新宮町、福岡市、福岡県）との間では、2017年より利用者の減少が続く駅・路線における利用状況に関する勉強会を年３～４回実施し始めました。

勉強会では閑散線区（甘木線・貝塚線）の現状を改善するための話し合いが行われ、自治体と連携した鉄道利用の促進・路線の維持に取り組んでいます。

自治体との連携内容は様々です。自治体の広報誌で路線の利用状況や維持への課題等を沿線住民に向けて発信したり、自治体と連携して鉄道利用促進キャンペーンを実施することもあります。

そういった勉強会を機に、沿線自治体とのタイアップ事業が実施されるようになり、本年度においても大刀洗町で開催された「枝豆収穫祭」との連携や新宮町の「相島」への来島促進キャンペーンなどを行いました。

「枝豆収穫祭」においては交通系ICカードnimocaによる運賃の30%ポイントバックをフックに、駅構内や電車内におけるイベントPRを実施。甘木線の利用数が向上するなど一定の成果を上げました。

「ねこのしま“相島”へ行こうキャンペーン」では、島の駅あいのしま商品割引や次回来島時に利用可能な片道乗車券「またくるにゃんきっぷ」をプレゼントし、期間中、約500名のお客さまにご利用いただきました。

相島に最も近い駅として【西鉄新宮駅】の認知向上にもつながったことから同取り組みを次年度も継続していく予定です。

今後も閑散線区の活性化を行い、路線・駅を沿線自治体や住民と共に守り育てることにより路線の維持、沿線の活性化に取り組んでいきます。

「どなたにもわかりやすい西鉄バスに」
学生と協力して、天神・博多エリアのバスのりば総合案内マップ一新

西鉄では、地元の方にも観光客の方にも「どなたにもわかりやすい西鉄バス」を目指して、バス情報案内の充実を進めています。2017-2018年は「どのバス停からどのバスに乗ればいいのかわかりづらい」という不安を解消するため、九州大学に協力を依頼し、バス停に掲出している「バスのりば総合案内マップ」の一新に取り組みました。今回は、企画を担当した九州大学大学院・伊原研究室の学生さんに話をうかがいました。

■「どのバス停から、どのバスに乗れば、どこに行けるのか？」一目でわかる天神・博多エリアのバスのりば総合案内マップを制作

2018年２月、天神エリアで19箇所、博多エリアで３箇所のバス停に、新たなバスのりば総合案内マップが掲出されました。エリア内のバス停の位置と、行き先に応じてどのバス停・どの行先番号のバスを利用すればよいかを、分かりやすく表示したものです。おそらく福岡市民にとっても複雑に感じている繁華街のバス停の情報を、近年増えている外国人観光客にも、わかりやすく表記しています。

この案内マップを手がけたのは、九州大学大学院芸術工学府・伊原研究室で、コミュニケーションデザインについて研究している江頭奈未さんと本田悠二さんの２人。今回のプロジェクトは、既存のポスターをデザインしなおすというものでした。

■ 情報を整理し、デザインのブラッシュアップを実施

まず２人は改善すべき点を洗い出しました。その結果、

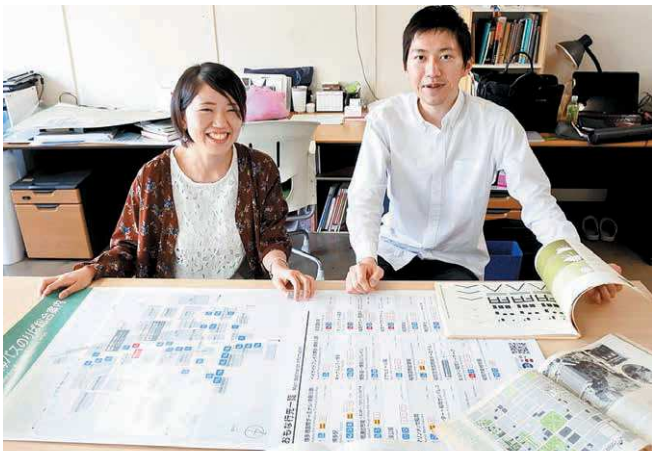
・文字が多すぎるのでは？
・日・英・韓・中の4カ国語の言語併記の方法が適切か？
・ポスター内に掲載しなくてもよい情報があるのでは？

という問題点が浮かび上がりました。続いて西鉄の担当者とともに、必要な情報を精査。「地図を含むバスのりば」「行先番号」「運賃」「所要時間」を的確にデザインしようという結論に至ります。

デザインの方針は、①必要な情報にアクセスしやすくすること　②非言語での表現を検討すること　③多様な人が見ることを想定することとしました。具体的には、まず地図の制作において、バス停とビルの関係が複雑なため、川や公園などを配置することで、利用者が現在位置を知るための手がかりとしました。

またポスター掲出の方角により、見えている方向を上にした異なる４つの地図を制作。さらに行先情報は、できるだけ非言語情報として表現。色やフォントをバス停やバス車体に表示される行き先番号のデザインと合わせることで、視認性をアップさせました。

さらに色覚異常のある人でも見やすいよう、色数は減らしつつ、明度差をしっかりつけたデザインに。韓国語と中国語は、スマートフォン等によるQRトランスレイターによる翻訳に一任し、日本語と英語でシンプルに表記しました。



このバスのりば総合案内マップは、リーフレットやホームページにも展開しています。

学校を飛び出し、社会と関わる責任の大きさを実感

このプロジェクトは、2017年７月に開始され、2018年２月に発表されました。江頭さんと本田さんは、進捗管理を含めて、検討、制作、掲出に至るまでプロジェクトの中心となりました。

主に地図の制作を担当した本田さんは「公に人の目に触れるものをつくったのは初めての経験でした。実際、バス停に掲出されたのを見ていると、研究室で制作しているときには想像できなかったくらい、多くの人の目につくものだと実感して、責任の大きさを感じました」。

全体のデザインの方向性を担当した江頭さんは、「手元で見るサイズの制作物と違って、サインとして最適かどうかの判断はとても難しく、何度も出力して貼って検討しての繰り返し。バス停のサインというのは、公共のものに限りなく近いので、しっかりした根拠がないと、説明もできないし、デザインもできないのだと実感しました」と話します。

「現在研究室では、実際にデザインとしてどのように機能しているかを調べるために、アンケートを実施しています。さらにユーザビリティを増すにはどうしたらいいかも、今後の検討課題です」と２人は今後の展望について語ってくれました。

この成果を端緒に、今後も大学との共同研究を継続し、新たな「わかりやすい西鉄バス」の取り組みを続けていく予定です。

天神の街と共に”西鉄本社「福ビル」58年の歴史

「天神交差点のにぎわい創成に」福ビル建設までの道のり

福ビルの歴史は古く竣工は1961年の12月31日、58年前の年末。

当時（1953年頃）福博の中心地ではビルの新築ブームまっただ中。55年8月の天神町市場の火災の跡地利用と天神町交差点周辺のにぎわい創成のため高層ビル（現在の福ビル）建築の構想が生まれたことが建設のきっかけとなりました。

福ビルの建設をめぐり、天神の再開発にも変化がありました。福岡郵便局敷地（天神交差点角地）と福岡銀行本店予定地（旧橋口町）とを交換する話が先行している中、地元関係者から「天神町交差点周辺をにぎやかな街に」という要望があがったことで福岡郵便局敷地であった天神町交差点に福ビルを建設することになったのです。（福ビルには商店街や文化施設の入居も予定されていたことがこの「土地の三角交換」の決め手となりました）

福ビルの建設は1958年の着工から資金計画の行き詰まりや入居応募状況の不振などにより一時は工事の継続困難という状況にまで陥っていましたが、西鉄不動産を通じて西鉄本社の入居申し込みがなされ西日本鉄道（株）は61年の12月15日に福ビル売買契約を交わし、同ビル5・6階の区分所有者となることで竣工に至っています。

西日本一のデラックスビルとして

「西日本一のデラックスビル」として、総工費25億円をかけて竣工した福ビル。敷地面積1,140坪、延べ建坪面積1万2,843坪、地下3階～地上10階建ての大型施設には冷暖房などの最新の設備を完備し屋上には遊覧観光を目的としたヘリポート計画もありました。

福岡観光の目玉となることを期待されていた屋上のヘリポートは近隣施設からの設置反対運動によって改装され、西日本ビルや天神ビル屋上の夏期ビアガーデンが人気であったことから1,000席の屋上と10階デッキのビアガーデン（500席）を開店しました。

その後も9階の結婚式場開設・インテリアのニック入居などによりさらに人の動きが活発化し、長年にわたって生活情報の発信地として福岡天神の街のさらなるにぎわいに寄与していたといわれています。

再開発事業の「中核」、“福ビル”の在り方

福ビル・天神コア・天神ビブレが立ち並ぶ「福ビル街区」は、福岡市中心部の再開発事業「天神ビッグバン」の中核として複合ビルの建て替えが進められています。

再開発のコンセプトは【創造交差点】。

近年、日本国内においても1・2を争う発展を遂げるここ福岡市において、「アジアと福岡・九州の創造交差点」「働きと暮らしの創造交差点」として多くのヒト・モノ・情報が交じり合い新しい価値を生み出し続ける場所を目指したいという西日本鉄道（株）の想いが込められています。

新ビルは2024年春に開業を予定。地下2階～地上4階は商業ゾーンで、地場を含む飲食店や服飾店などが多数出店し、地上5・6階には天神交差点を一望できる九州最大のスカイロビーを設置し、さらにスカイロビーへの導線を各階から集中させることで、偶発的な出会いから新たな文化やビジネスの創造を後押し。8～17階のオフィスフロアは福岡らしく、外資系企業や地場ベンチャー企業の入居を狙っており、18・19階は客室総数約50室のホテルとして生まれ変わります。

スタートアップ特区としての福岡市の取り組みや、例年話題となる福岡市内のホテル不足など、様々な面で福岡天神の街を支える複合ビルとなることを目指しています。